設楽発掘通信

No.24
平成２８年
１１月号

今年度の調査も終盤に近づいてきました。

五月からおこなってきた川向東貝津遺跡の調査もようやく九月中旬に終了し、九月下旬からは川向地区の大栗遺跡と大名倉地区の西地・東地遺跡の発掘調査がスタートしています。

範囲確認調査でも、あとは、根道外遺跡・滝瀬遺跡（いずれも八橋地区）を残すのみとなり、今年度の設楽地区での私たちの調査が終盤戦に近づいてきたことを感じるとともに、日頃ご協力をいただいている町民の皆様方には改めて感謝申し上げます。

遺跡調査の現場をご覧になっていただけるのは、十一月一九日（土）午前十一時からの西地・東地遺跡の地元説明会が今年度中では最後となりますが、来年の三月初旬前後には、また成果報告会を開催する予定です。

成果報告会の日程と場所が決まりましたら、またこの『設楽発掘通信』を通じて皆様方にご連絡を差し上げたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

（愛知県埋蔵文化財センター　樋上　昇）

写真１　滝瀬遺跡　建物跡１【1：床面検出状態、2：床面最下部の状況、3：見つかった炉跡】

滝瀬遺跡

では、竪穴建物跡の可能性もある配石遺構が見つかったことを、『設楽発掘通信』二十二号で紹介しました。その後の調査で、配された礫周囲から柱穴が見つかり、さらに中心付近から炉跡が確認されたことから、この礫自体を床面とした建物跡であることが明らかとなりました。遺構の時期は、縄文時代後期前葉（今から約四千年前）です。

このような建物跡は、敷石住居跡と呼ばれており、東海東部や甲信越、関東地域などで類例が知られています。愛知県では南知多町の林ノ峰貝塚に次いで二例目です。【詳細は四頁下段に続く】

滝瀬遺跡の発掘調査

現在滝瀬遺跡では、A区の一部とBd区の調査を行っています。（調査区割の詳細は設楽発掘通信第二一号参照）十月中旬にはBa区の調査が終わり、調査もいよいよ終盤をむかえています。Ba区ではいくつかの注目すべき遺構が見つかりましたので、今号ではそれらの遺構を紹介したいと思います。

一つ目は、集石遺構です（写真3）。Ba区では集石遺構と考えられるものを五基検出しました。同様の遺構は他の調査区でもいくつか検出しており、昨年度の調査や設楽周辺の他遺跡でも見つかっています。詳しい時期や性格は分かりませんが、炉などの可能性があります。

二つ目は、土器が集中して出土した遺構です（写真4）。Ba区南東部で検出しました。土器は縄文時代早期後半（約七千五百年前）のもので、破片が二十点ほど散らばった状態で出土しました。破片はいずれも似たような特徴が見られることから、同一個体かもしれません。

三つ目は、やや深い大型の土坑が三基見つかりました（写真5）。深さは約〇・五～〇・七メートルありました。中でもBa区北東部で検出した土坑は、二基並んだ状態で掘られています。貯蔵穴や陥穴などの可能性がありますが、遺物もほとんど出土しておらず、詳細な時期や性格は不明です。

最後に、Ba区の南部で広範囲にわたって地面がやや赤みを帯びている部分が見られました（写真6）。こうした部分は被熱している可能性があり、計七箇所ほど確認できました。川に近い位置に集中しており、何かしらの生活の痕跡かもしれませんが、詳細な性格は分かりません。

Ba区では、竪穴建物のような遺構は検出できませんでしたが、興味深い遺構をいくつか確認できました。今調査しているBd区はBa区の西隣に位置するので、多くの遺構が検出できるかもしれません。どうぞご期待ください。

（安西工業株式会社　岩瀬大輔）

写真 3　集石遺構

写真 4　土器集中遺構

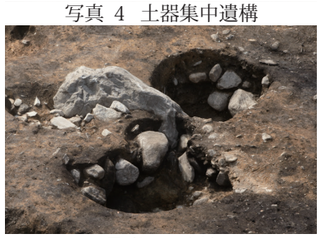

写真 5　土坑

写真 6　被熱範囲

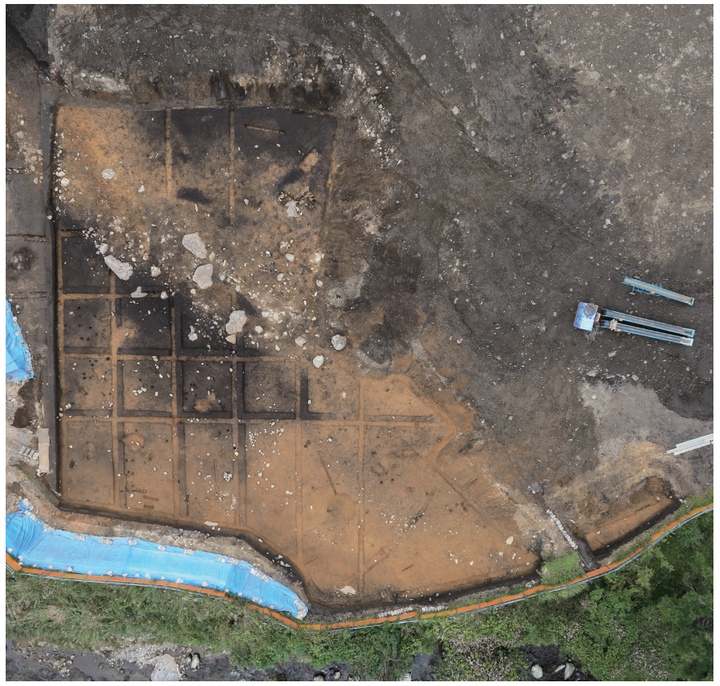

写真 2　Ba 区全景 (上が北)

大栗遺跡の発掘調査

大栗遺跡の発掘調査が、九月中旬から始まっています。発掘する面積は約3000平方メートルです。

A区（調査区北側部分）は十月で表土掘削が完了して人力による遺構検出作業を行っています。建物跡や柱穴のほか土器が出土する地点などを見つける作業です。今までに皆様にご紹介する遺構としましては中世から近世の石組遺構（写真7）が見つかっています。石組の内側と底面に火を受けて焼けた状態で出土しました。火葬施設の可能性が考えられます。土器片もわずかながら出土していますが近世の遺物がほとんどで対象とする縄文時代の遺物にはあたっていません。

昨年までの調査では縄文時代早期（約九千五百年前）の土器や多くの石器・剥片、縄文時代晩期以降の石鏃や弥生時代前期（約二千五百年前）の土器、古墳時代の土師器、平安時代の猿投窯で焼かれた灰釉陶器、室町時代から戦国時代の瀬戸焼、美濃焼に江戸時代の焼物や木製の桶や漆器も出土しています。縄文時代から近世までの遺物が見つかっているのが、この遺跡の特徴です。今回も同じ様な成果が期待できるものと思います。

西地・東地遺跡の発掘調査

西地・東地遺跡の発掘調査は、十月に入り、機械掘削が始まりました。その後、引き続いて遺構検出作業を行ったところ縄文時代の石器片や土器片が見つかり始めています。次回では成果を発表する予定ですのでご期待ください。

（安西工業株式会社　坂口尚人）

範囲確認調査

範囲確認調査は十月で川向地区の石原遺跡、大名倉地区の胡桃窪遺跡、大名倉遺跡の調査を完了しました。現在、八橋地区の根道外遺跡、滝瀬遺跡の範囲確認調査を行っています。滝瀬遺跡は本調査を行っている遺跡の範囲が西側の斜面のどこまで広がるのかを確認しています。

（安西工業株式会社　入江剛弘）

写真 7　石組遺構出土状況（奥が北）

トロトロ石器について

滝瀬遺跡から、トロトロ石器といわれる石器が見つかりました（写真８の１）。長さ三・五センチ、幅二・六センチ、幅〇・六センチ、重さ四・五グラムで、チャートという石材でつくられています。

写真では下端が二又になっており、石鏃の形に似ています。しかし、石鏃にしては厚手で極めて大型であること、写真上端が鋭くないことなどから、別の石器と考えられます。剝離により製作されていますが、先端から身部にかけての部分的な研磨・磨滅のため、表面がトロトロになっているように見えます。

この石器は、九州から関西、岐阜県域にかけて多く出土し、時期は、縄文時代早期前半の押型文土器に伴う（今から約八千八百年前）といわれています。この滝瀬遺跡の事例も、付近から押型文土器の後半のものが出土しており、このことを裏付けるものとなりました。愛知県下では、以前から小牧市総濠遺跡出土事例などは知られていましたが、近年、豊田市下山地区の猪移り遺跡でも出土しました（写真８の２）。この事例は、表裏の表面のみならず、両側辺にも研磨・磨滅した痕跡が認められ、細い平坦面ができています。

この石器の機能・用途は、まだよく分かっていませんが、特殊な石製品であるという説から、スクレイパーの一種ではないか、という説まであります。もともと異形部分磨製石器や異形局部磨製石器などと言われていた経緯も踏まえて、今後も検討すべき課題が多い石器であると言えます。（川添和暁）

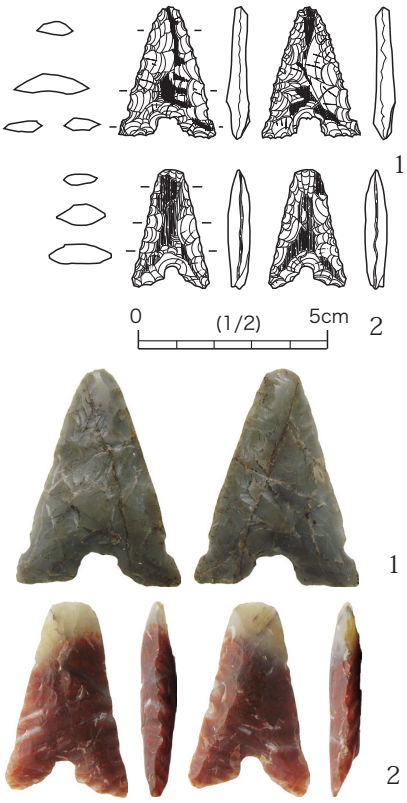

写真８　トロトロ石器【1：滝瀬遺跡、2：豊田市下山地区 猪移り遺跡（愛知県埋蔵文化財調査センター所蔵）】

滝瀬遺跡の建物跡について

一頁下段で、滝瀬遺跡で見つかった、礫を敷いた敷石住居跡について、取り上げました。敷かれた礫は扁平な板石が多く、所々火を受けて赤色化しています。また、写真１の１の左上部分では、一部には三重になった敷石部分がありました。、床の礫の上にさらに礫を貼り、床を更新したようにも見えます。さらに、この建物跡の下には、礫を敷く前の段階の建物跡もあり（写真９）、炉跡も同じ場所に重複していました。今回の調査は、この類の遺構の貴重な調査事例となりました。（愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁）

写真９　滝瀬遺跡　建物跡２

設楽発掘通信
No.24
平成２８年１１月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒４９８-００１７　愛知県弥富市前ヶ須町野方８０２の２４
電話　（０５６７）６７-４１６１【管理課】　４１６３【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter　https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　安西工業株式会社